

「縁・えにし」のよろこび

お盆を迎える前に…

7月27日、雨模様の中にも、総代会・仏教壮年会・仏教婦人会の皆さまに、境内の草刈りと納骨堂のお掃除をしていただきました。皆さまのお蔭で、お盆を迎えることができました。



～お盆法座～(8月13、14、15日)

コロナ対策をして、お盆法座をお勤めしました。今年から夕方(13、14日)も開座し、尊い3日間(全5座)でした。コロナ禍の苦難の中にも、ご門徒の皆さまが、手を合わせる時間を大切にされているお姿に、仏縁の尊さをいただきました。やっぱり、法座はイイですね!! コロナ対応をしながら、これからも“ご法座あってのお寺”であり続けて参ります!!



真教寺・今後の法座の予定

- 秋季・彼岸会 (9月18日 昼席-13:30・夜席-19:30)
- 親鸞聖人・報恩講法要 (11月11日夜席、12日昼夜席、13日昼席 昼席-13:30・夜席-19:30) コロナ対策(消毒、換気、時間短縮等)をして、ご法座をお勤めして参りますが、体調が悪い時などは、決して無理をされないでください。

ナモ(南無)net

～寺宝のご紹介～

お寺への寄贈を賜りました♪

- 仏具・中尊前上卓ちゆうそんまえじょうを、那珂川市松木の白水恵美子様より
 - 仏具・常香盤じょうこうばんを、那珂川市中原の白水良弘様より
- ※どちらもご本山・本願寺(京都)の仏具と同じ型になります。仏具は、本堂にお参りされた際にご覧ください。
- 「飛雲閣」の油絵を、春日市上白水の勝野準子様より
- ※本願寺にある国宝。豊臣秀吉の邸宅(聚楽第)の遺構と伝わる。金閣寺と銀閣寺とで三閣とされる。玄関ホールに飾らせていただいています。お参りの際にご覧ください。

中尊前上卓→



常香盤↑



飛雲閣→

阿弥陀さまからのお手紙

『み親とともに』

角 道宏(福岡市早良区 徳勝寺)

『大無量寿経(だいむりょうじゆきよう)』の中に、見老病死(けんろうびじょう) 悟世非常(ごせひじょう) 棄国財位(きこくざいい) 入山学道(にゅうせうがくじょう) 老・病・死を見て世の非常を悟る。国と財と位を棄てて山に入りて道(どう)を学(がく)すーと、お釈迦さまの出家の様子が出てまいります。仏教の出发点がここに示されているといっているのもよいでしょう。そして六年間のご苦労の後、菩提樹の下で仏陀となられたお釈迦さまは、老・病・死を見つめ、世の非常(無常)を悟り、私たちに答えを示されました。

「人生は苦である」 思い通りにならないよと。まさしくその通りです。私たちの苦悩は、思い通りにならないことをなんとか思い通りにしようとするところから生じるといってもよいでしょう。

「老・病・死」のなかに生きながら、何とか「老・病・死」から逃れたいとがいてるのが、私たちの生きざまです。その思いの中心は「老・病・死が不幸である」という見方です。

ある先生は「老・病・死が不幸であるならば、どんな人生も不幸の完成で終わる」、また、その生きざまは「老いによってしほみ、死によって滅んでいく人生である」と言われました。それこそ空(むな)しく過ぎる人生ではないでしょうか。

しかし、お念仏に出遇った人生は「老いによつてしほみせず、病によつて傷つかず、死によつて滅

びない人生」に転じられていくことだと、その先生は結ばれました。

お釈迦さまによって明らかにされた阿弥陀さまのはたらきは、この私の生死の解決です。小学生の女の子の『おち葉』という詩です。

おちてくるね あつちもこつちも
木からはなれたばつかりの
新鮮なおち葉だね

また、こういう詩もありました。
きれいだね おち葉の花が
いっぱい咲いている

目から鱗(うろこ)でした。私も、もし長生きをして年をとったら、濡れ落ち葉ではなく、新鮮な老人になりたいと思うところです。

あるお寺の掲示板に、
病気が治るのがご利益ではない
どんな病気になるてもいただいたいのを
生き抜くことができる これがご利益だ
と書かれていました。私たちは縁があれば、どんな病気にもなります。病気をかかえて生きていける人生、本当に力強いことです。

また、「臨終はこの世の卒業式、お浄土の一年生」と喜ばれた方がおられました。いつか娑婆(しやば)の縁尽きる私たちは、阿弥陀さまのはたらきによって必ずお浄土に往生生まれさせていただくいのちを賜るのです。

阿弥陀さまは、この私が縁あってどんな人生を送ろうとも、どんな死にざまをしようとも「絶対に見捨てぬ、必ず救う」と誓われ、南無阿弥陀仏という六字のお名前の中に、この私が救われるすべての手だてをご用意なされ、私の口から飛び出してくださるお念仏となって阿弥陀さまの方から至り届いてくださいます。「二子地(いっしじ)」わが一人子よという親の名告(なご)りをもって親

心となって至り届いてくださるのです。浄土真宗はご安心(あんじん)をいただくみ教えです。親鸞聖人は「釈迦・弥陀は慈悲の父母(ぶも)」と喜ばれました。ここにどんなことがあっても絶対見捨てぬ親がいるよ、その親心の中で人生を生き抜いておくれ、と私を包んでくださいます。阿弥陀さまは安らぎの心を与えたいとはたらくてくださる仏さまなのです。

われわれ凡夫の親は、縁があればどのような変わり、また何をしでかすかわからない存在です。

私は生きるために生まれてきた
親におこられるために生まれてきたんじゃない
親っていうのは
木の上に立つて子どもを見るって書くんだよね
お父さんは木の上に立っていない
子どもの上に立っている

『お父さんへ』と題した五年生の子どもの詩です。この詩を読んで思わず唸(うな)つてしまいました。「お父さん、おこらないで、しかつてよ」という詩にも出遇いました。自分の感情にまかせておこつてばかりいる私です。この凡夫の親のところ、絶対間違わぬ真実の親がここにいます。喚(こゑ)び続けの阿弥陀さまです。

「荷負群生(にがひぐんせい) (群生を荷負し)」というお経の言葉があります。阿弥陀さまは私のところに親心となつて至り届き、私を背負ってくださいます。お念仏に出遇う前の私の足跡のうしろには「いつでもいできとるぞ」と阿弥陀さまの足跡がついていたのです。そして、お念仏申す身となつてからの私の人生には、私の足跡ではなく、阿弥陀さまの足跡しかついていないのです。阿弥陀さまのお慈悲に背負われて阿弥陀さまとともに、老・病・死をかかえてお浄土に向かつて生きていくのです。

(この法話を書かれた角先生は、今年の「報恩講法要」の講師です。)